

貸し農園施設の形態別利用者特性分析
The Analysis of users of Allotment Garden at each types

森塚圭一* 星 啓** 徳永幸之***

By Keiichi MORITSUKA, Hiraku HOSHI, and Yoshiyuki TOKUNAGA

1. はじめに

近年、中山間地域の過疎化や遊休農地への対策として、都市住民が農作業やレクリエーション的に利用する市民農園が開設されるようになった。市民農園には様々な形態があり、利用状況にも差があることから今後の農園整備の方向性を考える上で形態別に分析する必要がある。

市民農園は近郊型と滞在型の2形態に大分出来る。さらに近郊型、滞在型内においても異なる形態が存在し、利用者の属性や意識は異なると考えられる。市民農園利用者の属性分析は松永²⁾らにより行われているが、これは近郊型のための調査であり、滞在型利用者との比較は行っていない。さらに、神吉³⁾は、都市住民の農村への来訪目的を調査しており、滞在型農園利用希望者は中年の家族連れが多く、それは農村に触れる目的であるという結果が出ている。しかし、これは農村来訪者の意識であり、実際の農園利用者の意識ではない。本研究では、農園をその特性から分類し、アンケート調査に基づくデータにより利用者の属性と意識を形態別に比較する。さらに農園整備の今後の方向性を明らかにするため、中山間地域における農園に対する利用希望を形態別に明らかにする。

2. 農園の特性

東北地方と新潟県の近郊型15農園と、滞在型は群馬県倉淵村、長野県四賀村の2つのクライנגルテンの2農園について総面積等の施設とサービスを変

表-1 農園の主成分分析結果

変数	固有ベクトル	
	第1主成分	第2主成分
1区画面積	0.48	-0.24
単位面積あたり料金	0.47	-0.04
総面積	0.52	0.13
農機具貸出の有無	0.29	0.87
宿泊施設の有無	0.44	-0.41
寄与率	0.58	0.18

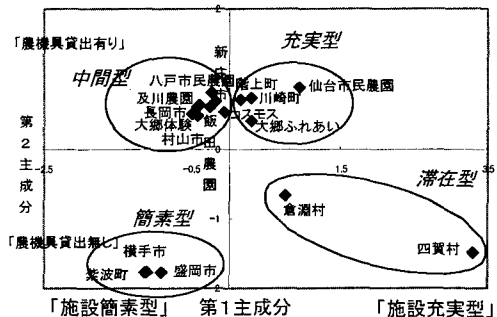


図-1 農園のサンプルプロット

数として主成分分析を行った。表-1より、第1主成分(+)は規模が大きく料金が高いことから施設の充実度を表しており、第2主成分(+)は農機具貸出が有り、宿泊施設がないという一般的なの市民農園であることを表している。この軸上に17農園をプロットしたのが図-1であるが、このように農園を4グループに分類できる。盛岡、横手、紫波町は農機具貸出の無い「簡素型」に属しており、仙台市近郊の仙台市民農園、川崎町、大郷ふれあい農園等は「設備充実型」という特徴がある。その他の近郊型農園はその中間にある「中間型」であると言える。

このような3つの近郊型に対し、宿泊施設のある「滞在型」がある。

3. 利用者実態調査

近郊型は、15農園を対象として平成9年8,9月に、
滞在型は群馬倉湊村、長野県四賀村の2つのクラ
インガルテンを対象として同11,12月にアンケート

Keywords: 意識調查分析、市民農園

* 学生会員 東北大学大学院 情報科学研究科

正会員 東北大学工学部土木工学科技官

*** 正會員 工博 東北大学大学院助教授 情報科学研究科

〒980-8579 仙台市青葉区荒巻字青葉06

TEL 022-247-7502 FAX 022-217-7500

表-2 アンケート回収結果

	配布数	回収数	回収率
近郊型	991	577	58.2%
滞在型	236	106	44.9%
計	1227	683	55.7%

調査を実施した。調査票は農園で来園者に配布または郵送配布し、郵送回収した。回収率は表-2に示すとおりである。

4. 利用者属性

図-2に近郊型と滞在型の各年齢構成を示す。近郊型と滞在型の年齢構成は有意水準1%で異なり、近郊型では60歳以上の利用者が多いのに対し、滞在型では60歳未満の利用者が多い。そのため表-3のとおり滞在型は有職者の利用者が多い。さらに近郊型でも簡素型は無職者の割合が高く、充実型は有職者が多い。図-3の来園同行者割合を見ると、滞在型は単独が明らかに少なく、家族や友人と来園する場合が多い。近郊型では簡素型ほど自分一人で行く傾向が強い。近郊型で利用する曜日を聞いたところ（図-4）、無職者が多い簡素型は休・祝日に来園することは中間・充実型に比べ少ない。さらに、簡素型は来園の際の交通手段としては（図-5）、徒歩や自転車の割合が高く、それに伴い交通所要時間（図-6）も20分未満で9割を占める。このことから、簡素型は手軽な農作業の場として利用されているのに対し、充実型はレクリエーションとしての位置づけが強い傾向にある。このことは滞在時間（図-7）にも表れており、設備が充実するほど滞在時間が長くなっている。図-8は利用後の意識を示したものであるが、滞在型と近郊型で、有意水準1%でその比率に差がある項目は、「新鮮な野菜が取れた」「子供に自然体験させた」「新たな交流が生まれた」の3項目であり、近郊型では農業そのものに対する満足度が高いのに対し、滞在型では自然とのふれあいや交流に対する効用が高くなっている。近郊型同士で見ると、設備が充実するほど、農作業の意識は薄れレクリエーションや、子供の自然への体験に対する満足度が高い。

同じ滞在型農園でも、倉淵村は共同宿泊施設、四賀村は1区画1ラウベと形態は異なる。両者で利用者の年齢、有職の割合に有意な違いは見られないが、

図-9より、宿泊施設の違いにより倉淵村は8割が日帰りし、四賀村は7割が宿泊している。利用動機は、共同宿泊である倉淵村では「レクリエーションとして楽しむ」や「自然と親しむ」が有意に多かったのに対し、1区画1ラウベの四賀村では「新たな交流を求めて」や「新鮮な野菜が作れる」「無農薬・低減農薬野菜が作れる」が有意に多くなっている。このことより、1区画1ラウベタイプの利用者は農業目的で、共同宿泊タイプはの利用者は交流やレクリエーション目的で利用している傾向がある。

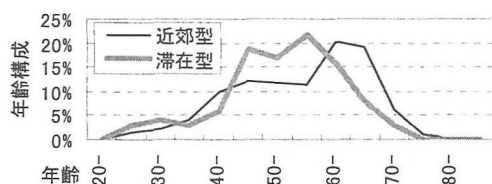


図-2 両形態利用者の各年齢割合

表-3 有・無職の割合

	有職	無職
簡素型	39%	61%
中間型	56%	44%
充実型	59%	41%
滞在型	70%	30%

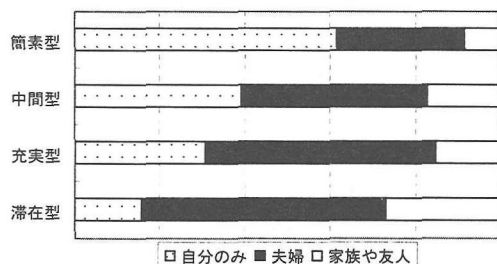


図-3 来園同行者割合

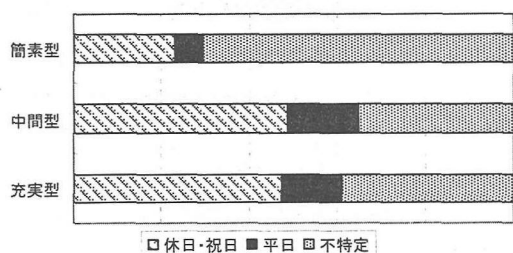


図-4 利用する日

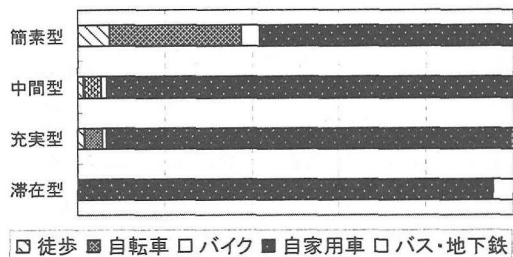


図-5 交通手段

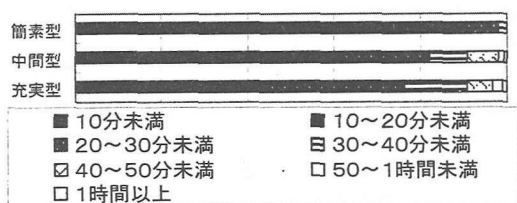


図-6 交通所要時間

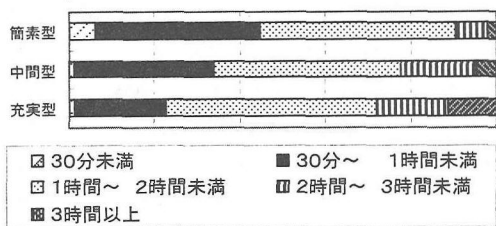


図-7 滞在時間

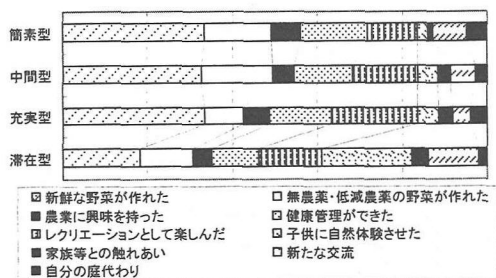


図-8 利用後の意識



図-9 滞在期間

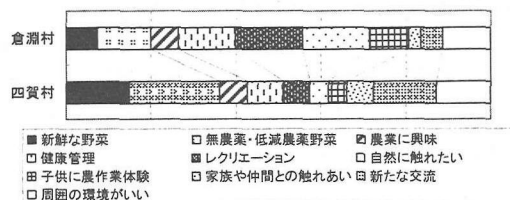


図-10 滞在型利用動機

5. 利用者属性による分類

各農園利用者の性別、年齢、動機等の個人属性8アイテム(18カテゴリー)で数量化Ⅲ類分析を行った。カテゴリープロットを図-11に示す。横軸は第1固有値(0.21)を表しており、正の領域は「交流」、負の領域は「農作業」自体を目的としている利用者である。縦軸は第2固有値(0.18)を表しており、年齢層を表している。図-12に、仙台都市圏と滞在型のそれぞれ2農園のサンプルプロットを示す。仙台市の飯田農園と滞在型の四賀村では農作業を目的とする人が多い傾向があるが、倉淵村ではやすらぎを求めて利用する人が多い傾向がある。図-13は仙台市民農園の利用者のみをあらわしたものであるが、「高齢・農作業目的型」「若年・交流目的型」「中間型」と3分出来る。それぞれの利用者がどのタイプの農園を利用しているかを表したものが図-14である。高齢・農作業目的型は簡素型を選ぶ割合が他の利用者よりも高くなっている。

次に、東北地方における15農園の利用者に対し、中山間地(自家用車で90分)にある割安で広い(千円/坪、50坪まで利用可)農園(東屋付き)の利用を希望するかを聞いた。利用希望率が20%を越えているのは仙台圏にある4農園と盛岡市の1農園である(図-15)。新庄や長岡では利用希望者はおらず、中山間における滞在型農園は仙台規模の都市住民を対象として行うことが前提と考えられる。仙台都市圏で農園利用希望率が低い、大郷ふれあい、飯田の

2 農園は、利用状況は良好で現在の状況に満足しているため、利用希望率は低くなっていると考えられる。さらに仙台市民農園の利用者グループ別の利用率を全体の比較する。図-13中の%は農園Aの利用希望率を示している。「若年・交流目的型」になるほど利用希望率は高い。滞在型利用希望者は顕在化しているだけでも近郊型現利用者の2割弱あり、また仙台圏を対象とした場合、人との交流を目的として利用する割合が高いことから、潜在需要も十分あると考えられる。

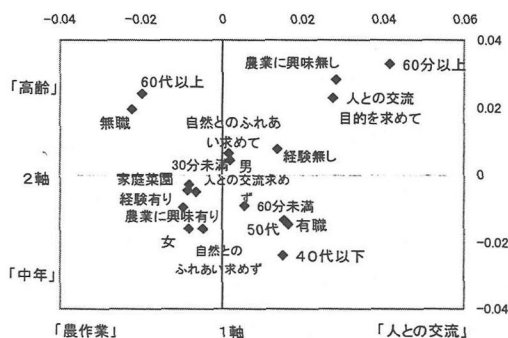


図-11 利用者のカテゴリープロット

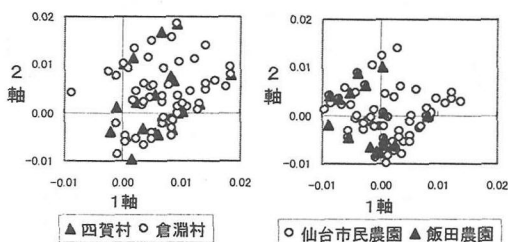


図-12 利用者のサンプルプロット

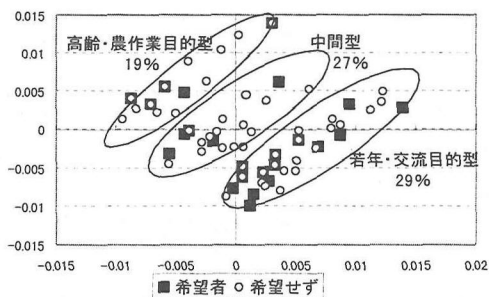


図-13 仙台市民農園の農園A利用希望

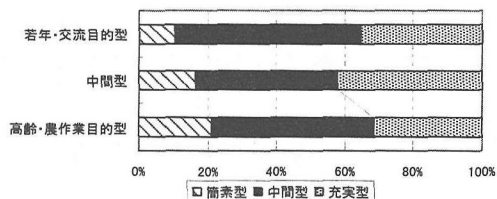


図-14 利用者属性別利用農園

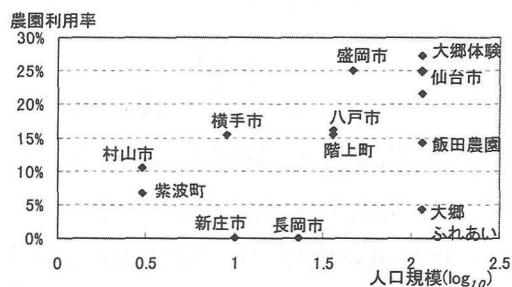


図-15 人口規模別農園A利用率

6. 結論

以上分析により、次のことが明らかになった。

- ①年齢は滞在型が若く、有職者も多い。
- ②近郊型は農作業を、滞在型は交流を目的とした利用者が多い。
- ③近郊型農園は簡素、中間、充実の3タイプに分類でき設備が充実するほどレクリエーション的な志向が強くなる。
- ④利用者は高齢・農作業目的、若年・交流目的、中間型の3分類でき、高齢・農作業目的型は簡素タイプの農園を利用する傾向がある。
- ⑤農園特性、利用者属性の両観点から見ると、近郊型のうち滞在型に最も近いのは充実型である。

今回の調査は、今後の農園整備の方向性を知るための調査であった。しかし、仮想農園の利用希望はある程度の傾向を示したものの明確ではなかった。今後の課題として、滞在型の潜在需要を予測するために、仮想農園の形態をより明確にして調査を行う必要がある。

参考文献

- 1) 松永理恵・李 洪泰・進士五十八(1996)「都市地域における市民農園利用の現状並びに施設整備・運営への改善方向」都市計画論文集, No31, pp.25-30
- 2) 神吉紀世子(1996)「グリーン・ツーリズムの取り組みと都市市民の余暇活動ニーズの対応に関する研究」都市計画論文集, No31, pp.109-114